



従業員とコミュニケーションを図る山本洋治 (左から2人目) = 浜田市長浜町、浜田港運

## 外材の輸入を積極的に推進 取扱量の増大で社業が伸展

の輸入に伴う植物防疫法の適用により、9月に民間協力団体として浜田植物防疫協会が設立され、社長の宮下又一が会長に就任した。

### 荷役の近代化に努める

一方、浜田港運は37年10月、従来の海運業、回送業に加え、港湾運送業、海上運送業、船舶代理店業、通関業、自動車運送取扱事業、倉庫業なども手掛け、事業が大幅に拡大していった。

宮下又一は、特に重要港湾の指定維持確保のため、外材などの輸入促進を積極的に進め、荷役の近代化に努めるなど商港発展の基礎を築いた。東京五輪が開かれた昭和39年、長浜から約2.5離れた周布川河口に周布木工団地が完成。県営水中貯木場もあり、外材を加工する合板など企業



木材を荷降ろしするソ連船



輸入されたウッドチップの積み降ろし作業

の新設が相次いだ。国道9号も、41年に全線の整備が完了した。

外材輸入の増加に対応するため、昭和41年には5千トンパスが完成。マレーシア、フィリピン、ソ連、現ロシアなどから木材が運び込まれ、韓国からは竹や絹雲母が入った。42年には米国、ニュージーランドから木材が初輸入された。

木材の輸入増による作業量の増大に対応するため、荷揚げ機、運搬船など機材を充実していった。資本金も日本通運、日新林業、西日本木材工業(現島根合板)などの資本参加により昭和37年の320万円から41年に960万円、44年には1920万円、さらに47年には現在の3千万円へと増やし、着実に力を付けていった。

### 総力あげ経営基盤強化

このころは、広島検疫所や神戸植物防疫所の出張所開設、浜田港湾合同庁舎の新築開庁などがあり、昭和45年6月には浜田港運も通関業の免許を取得した。この年は現会長で3代社長となる宮下義重が入社し、右腕となって父の宮下又一を支えた。

商港の充実と並行して経営基盤を強化。1台2千万円を越す荷揚げ機を導入するなど、質ともに全国の港運会社ものにひけをとらない機能を備えたものの、昭和50年代前半には外材入荷が減り、厳しい環境に直面した。このため「総力をあげて経営基盤の確立に努力しよう。陰ひたなく忠実な仕事をしよう」をモットーに全社員が一丸となって社



浜田港運の旧社屋



3代社長の宮下義重

商港としての整備が進むにつれ、浜田港運の業務量も少しずつ増えていった。中でも昭和32年の重要港湾指定で本格的に港の整備が進むと、ラワン材など外材輸入が増加し、社業が大きく伸展していった。

### 浜田港が重要港湾に指定

浜田市の経済発展には、浜田港を生かした貿易や漁業の振興が欠かせず、中でも昭和25年に制定された海上輸送の拠点となる重要港湾の指定が切望された。

当時、山陰地方には26年指定の境港しかなく、国際・国内海上輸送網の拠点となるだけに、整備費用に関係する国



平成11年の完成を目指し福井地区で進む埋め立て工事



直接荷積みで輸出されるさば缶詰

庫補助金は地方港湾に比べて高率に設定されるメリットがあった。

昭和30年8月1日に国鉄(現JR)の浜田港駅が開業され、西浜田駅との間に山陰本線の貨物支線となる浜田港線が開業(昭和57年に廃線)するなど周辺整備が進む中、35年から5カ年計画で本格的な整備が進められた。

この年は、ラワン材を積んだ外国船が初入港し、36年にはソ連船が初入港した。さらに37年5月には、木材輸入港の指定を受けた。また、外材

業を推進し、50年代後半は3億円の年商をあげた。

一方、木材などを運ぶ陸上交通網のインフラ整備は遅れたままで、関係者の悩みの種となってきた。このため、周布の木工団地を通り、国道9号につながる海岸線道路の新設を求め、声が強くなるようになった。

平成に入ると、元年はオーストラリアからウッドチップが初輸入され、翌2年は大型旅客船「ばしふいっくびい」が初入港した。4年はインドネシア産合板が初輸入されるなど国際化がさらに進んで浜田港の取扱量が増加し、唯一の荷役業者の浜田港運の業務量も増加していった。

(敬称略)  
―次号に続く―  
(編集止)

【会社概要】  
▽所在地 浜田市長浜町1785-7  
▽営業科目 港湾荷役、通関業など  
▽代表者 山本 洋治  
▽従業員数 44人  
▽電話番号 0855-27-0072